

日本におけるバウビオロジー

バウビオロジーとの出会い

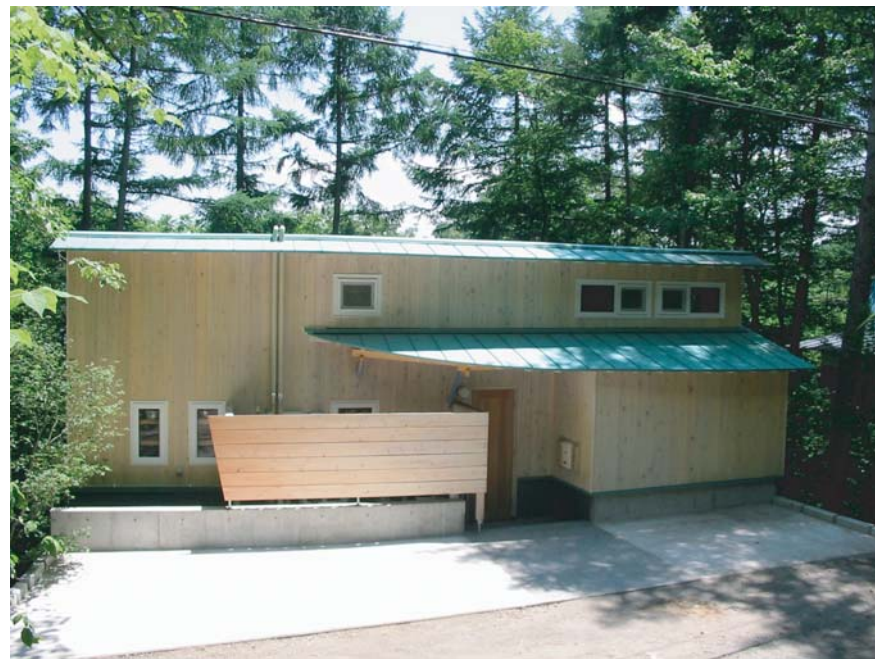
1997年の夏に、ある建築雑誌のインフォ欄に、ドイツ・リボス社の研究員エガース女史が大阪で講演をするという記事が目にとまった。なぜかこの記事に曳かれるものがあり、詳細を聞くためにすぐ主催者（日本のリボス社）に電話をしたのである。電話をとおしてその主催者から、ホルガー・ケーニッヒの「健康な住まいの道」の日本語訳を突然依頼され、三年の作業の末に2000年に出版されるに至った。今でもその出会いをなつかしむ。長年にわたるアントロポゾフィーの学び、ゲーテ時代の建築論についてのミュンヘン工科大学での学び（1991-1993）が、私にとってのバウビオロジーへの内的準備となったと思う。

大学でのバウビオロジー

2001年に私の勤務する前橋工科大学建築学科で新しい科目としてバウビオロジーを選択科目（1年後期）に導入することができた（今日加えて2年前期も）。会議では幸いなことに同僚からの反対はなかった。バウビオロジーが何か分からない方も多く、賛成／反対を表明する判断材料がなかったのかもしれない。今日、日本発信のいわゆる「スター・アーキテクト」の存在が学生に魅惑的に見えるようだが、バウビオロジーは人間の尊厳を守り、環境にやさしい建物をテーマとする点で、学生も自分のこととして聴講している。つまりテーマは現代的な社会問題や、自分の健康という日々の生活と密接に関係しているのである。子どもの頃から喘息もちだった女子学生はあるときレポートにこう記した。「住まいは自然の一部であるならば、人間にとっての巣であるのでしょう。バウビオロジーは私たちの責任という感情を促しているように思います。」私の大学での講義は上記の「健康な住まいへの道」とアントン・シュナイダー博士の「バウビオロジーの25の指針（IBN）」に基づいています。後者は2003年に日本語版として出版したものです。

人間と環境

2004年に私たちは長野県軽井沢町に居をかまえた。避暑地、別荘地として知られているが、



軽井沢の家（設計：石川研究室）

ドイツに暮らし住んだ経験から、似た気候でもあり、普通に住むべき場所だと思っていたのである。海拔1000mという立地条件はそれなりの建築条件をもち、バウビオロジー的な実験住居としたかった。そこで様々な自然素材を使うこと、壁、屋根にBSパネル（釘打ちの集積パネル）を使うことは勿論、日本では未知な、放射熱を使う壁面暖房を試行した。空気温度を上げずとも快適性が得られ、試みとしては成功したと考えている。この地に住み始め、自然の変化に敏感になり、自然の恵みに感謝する気持ちが芽生えた。「自然とともに、自然のなかで！」自然は人間を生気づけることを実感している。ちなみにも国際バウビオロジー会議が日本で行われるとしたら、軽井沢の地は会議地として素晴らしいのではないだろうか。

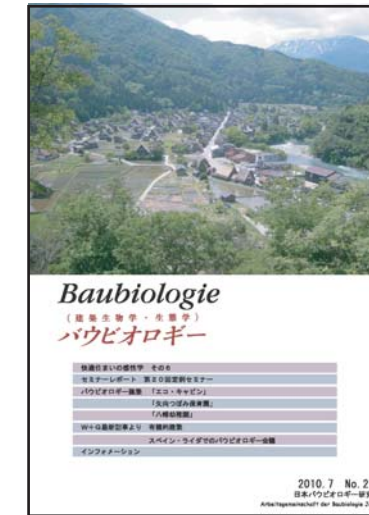
日本バウビオロジー研究会

日本バウビオロジー研究会は2005年3月に設立した。目下110名の会員を数え、その多くは設計士、工務店経営者、建材業者である。設立時にアントン・シュナイダー博士からお言葉を頂戴したように、IBNとの連携は密である。活動としては年4回の定例セミナーと年4回発行の機関紙（「バウビオロジー」）が主である。

ちょうど5年経つゆえ、今まで（2010年5月時点）に20回のセミナーが開催され、毎回バウビオロジーのテーマで2人の講師をお招きしている。他に海外の専門家（ホルガー・ケーニッヒ、ゲルハルト・シュスター）をお呼びしての特別セミナーも開かれている。定例セミナーに関して、適切な講師を見つけることはしかし、容易なことではない。今までに例えばパッシブ・ハウスとゼロ・エネルギー住宅について（2009年6月に建築見学会を通して）、寝室環境と健康な眠りについて（2009年9月）、都市内農地について（2009年12月）などが最近のテーマである。各回20～

30名の参加者である。

機関紙「バウビオロジー」は3ヶ月ごとの発刊であり、バウビオロジー建築、民家探訪、セミナーレポート、「住まいと健康」翻訳記事などで32ページからなる。全国の公立図書館、建築系大学に贈呈しており、専門家にも、一般の方にもバウビオロジーを知ってもらう、関心をもってもらうことは、会の一つの目的である。



機関紙「バウビオロジー」

通信教育バウビオロジー

日本におけるバウビオロジーの静かなる誕生の時を経て、私たちは、更なる一歩を踏み出そうとしている。通信教育バウビオロジーIBNの日本での展開である。バウビオロジーは測定器具を持つての技術的レベルにとどまるものではない。全体性の理念が不可欠であり、測定結果の専門的な評価と、アドバイスを求める多くの人々に対する助けこそが決定的な意味をもっていると思われる。それゆえ専門家養成とアドバイスが私たちの活動のパースペクティブを描き出す。

私たちは2100ページからなる通信教育のテキストを日本語に翻訳することを既に開始している。そのために翻訳の専門家が

必要であるし、日本版のための補遺・補足も必要であり、理事を中心にした専門家のサポートが求められている。

レンガ造は皆無である一方、主たる構造は木材であるように、翻訳における補遺作成にあたっては、日本ならではの気候条件、建築文化を考慮しなければならない。重要なことは、通信教育が公の場で認知され、その必要性が社会で高まっていくようにマネージメントしていくことである。

スペインにおける昨年のバウビオロジー研究所の設立、またその前年のフランスでの研究所開設は、私たちの活動に勇気を与えるものであり、責任を意識しつつこの課題を遂行していきたい。現代日本における分裂・分散化された知識による危機的な住宅事情を見据えて、バウビオロジーの総合性はなによりも重要であると考えられる。

石川恒夫

ishikawa@maebashi-it.ac.jp



履歴：

石川恒夫

1962年東京に生れる。早稲田大学で建築を学び、1987年より東海大学上松研究室個人助手。1991～93年ミュンヘン工科大学（ドイツ学術交流会による）。1995年工学博士。2001年より前橋工科大学大学院准教授。2004年バイオ・ハウス・ジャパン一級建築士事務所（大学発ベンチャー）設立、同代表取締役。2005年日本バウビオロジー研究会設立。